

## 後撰和歌集の撰者問題をめぐって

―はたして壬生忠見は撰者の一人か―

Was Tadami one of the selectors of “Gosen wakashu”?

工藤 重矩

KUDO Shigenori

(国語教育講座)

(平成二十一年九月二十四日受理)

### 一 はじめに

後撰和歌集の撰者は、通説ではいわゆる梨壺の五人(清原元輔、紀時文、大中臣能宣、源順、坂上望城)とされている。だが、撰者は梨壺の五人ではないとする説もあって、例えば熊谷直春氏は、撰者を藤原伊尹、平兼盛、壬生忠見の三人であるという(「梨壺における事業の再検討」『国文学研究』昭和五五年、のち『平安朝前期文学史の研究』平成四年桜楓社)。わたしは、撰和歌所別当の藤原伊尹が宣旨を蒙った「撰者」で、梨壺の五人は編纂室員にあたる「召人(寄人)」であろうと考えている。だから実質的には梨壺の五人の編纂と言っても誤りとまでは言えないとも考えて、熊谷氏の提案に疑義を呈した(「後撰和歌集の撰集に

関する諸問題」昭和六一年、のち改題して『平安朝和歌漢詩文新考 継承と批判』平成一二年風間書房)。

それに対して熊谷氏の幾度かにわたる批判があり、それらは『古今集前後』(平成二〇年武蔵野書房)に収載された。単行本にまとめられる以前から熊谷氏にはそれらの論文の中で、熊谷説に批判があれば反論して欲しいと要望され続けていたのだが、ひとつには論点を整理し再検討する時間的余裕がなかったこと、またひとつには結局は主張の繰り返しになるかもしれないことを恐れて、なかなか取り掛かれないでいた。しかしながら、『古今集前後』の後撰和歌集関係論文を見ていくうちに、やはり書いておいた方がよいかもしれないと思う論点もあり、ここに後撰和歌集の撰集をめぐる問題について再論することとした。

熊谷氏の『古今集前後』の主張と通説への疑義は多岐にわたり、これまで曖昧なままにされてきた事柄への詳細な検討がある。今後、後撰和歌集について論ずるさいには、その論者の拠って立つところを明らかにするために、必ず熊谷説に言及せざるを得ないであろう。本稿執筆もそれ故のことであるが、どちらにでも解釈できる問題点、また梨壺の五人説を前提にすればこう解釈できる、或いは伊尹・忠見・兼盛説を前提にすればこう解釈できる、そのような箇所には原則として触れない。ただし、どうしても触れざるを得なかったところもある。

## 二 梨壺の五人に関して

熊谷氏は「梨壺における事業の再検討」で主張された自説を『古今集前後』（以下、新著と言う）に次のようにまとめている（四九〇頁）。それをそのまま引用する。

1 梨壺の五人と『後撰集』と結びつくのは『後二条師通記』の寛治七年（一〇九三）五月二十七日条以降で、百四十年も経過している（後拾遺集の序では後撰集の文字が見えない。この頃から誤解が始まった）。

2 奉行文・禁制文・規子内親王家前裁合等の関係資料は『万葉集』のことのみ触れて、『後撰集』のことは一言も触れていない。

3 撰者の歌が一首も存在しないという例は、他の勅撰集にはない。撰者と言われる梨壺の五人の歌は、『後撰集』に一首もない。

4 『後撰集』の撰者は、藤原伊尹・平兼盛・壬生忠見の三人で、事業の奉勅は天曆八年（九五四）五月、完成は同九年（九五五）八月上旬である。

右の主張に対してわたしは前記の拙論で、梨壺の五人は撰者ではないという説は成立しないことを述べたのであるが、熊谷氏の反論があり、それは新著の第六章に述べられている。1については改めて言うべきことはない。3については水掛け論になるケースである。4のことは章を改めるとして、ここでは2についてのべる。

奉行文・禁制文の解釈。梨壺の五人を禁制文に言う「寓直の徒」即ち「召人（寄人）」であるとする私解に対する批判もあったが、最終的には熊谷氏も「寄人」だと理解されている（五七八頁）ので、その点について問題はない。禁制文については万葉集・後撰集のことに触れているかどうかが問題になるが、これもいま私としては新たに付け加えるべき点はない。

ただし、2について「2は困難な問題を抱えているが、消極的に言えば、いづれの資料も後撰和歌集を撰ばなかったとは言っていないと言えるし、積極的に言えば、『禁制文』は後撰和歌集のことを述べていると考える」（拙著二〇〇頁）と言ったことのうち、前半については訂正しなければならない。源順集・規子内親王家前裁合の関係記事は、「後撰和歌集を撰ばなかったとは言っていない」のは確かだが、『万葉集』のことのみ触れて、『後撰集』のことは一言も触れていない」のも確かであり、『万葉集』のことのみ触れて「いるものとして扱わなければならない」。

いまあらためて順集一一七のその詞書を引く。本文は『新編国歌大観』による。

天曆五年、宣旨ありて、やまとうたえらぶところ、なしつばにおかせ給ふ、古万葉集よみときえらばしめ給ふなり、めしおかれたるは

河内掾清原元輔、近江掾紀時文、讃岐掾大中臣能宣、学生源順、御書所預坂上茂樹らなり、藏人左近衛少将藤原伊尹を、其ところの別当にさだめさせたまふ、かみなづきのへいはくにいはく、かみなづきかぎりとおもふもみぢばの、とあり、おのおのうたをたてまつるに

詞書のうち「かみなづきのへいはくにいはく」の「へいはく」の部分には本文の誤りがあるようだ。さてこの詞書は奉行文とも矛盾せず、この五人が天曆五年に梨壺の撰和歌所に候したことは疑いない。そして、この詞書の言う範囲で解すれば、「古万葉集よみときえらばしめ給ふなり」の言い方からして、万葉集の読解再編が行われたことのみを述べていると理解するのが素直であろう。「よみときえらばしめ給ふ」を、「古万葉集を読み解き、(新たな勅撰集を) 撰ばしめ給ふ」と解するのはかなり苦しい。

また、天禄三年八月規子内親王家前裁合(『平安朝歌合大成二』歌合番号七二)の

そもそも、順、むかし梨壺にはならの都の古歌よみときえらび奉りし時には、すこし呉竹のよこもりて、行くすゑ頼みし折節も侍りき。今は草の庵に、難波の海のあし(葦・脚)のけに悩み患ひ、こもり侍れば、すべて割れ船の、引く人もなぎさに棄てられて、おかれたらむ心ちなむしける。(下略)

もまた、万葉集のことしか書かれていない。

したがって、同時代の資料として、梨壺の五人が後撰和歌集に関わったことを直接に示す資料はないとしなければならない。これは熊谷氏の主張の考慮すべき点である。

順集・規子内親王家前裁合は梨壺の五人の後撰和歌集撰者説の直接資

料には使えないが、奉行文・禁制文については、順集・規子内親王家前裁合とは関係なしに、なお後撰集関係資料とすべき余地のあること、拙著に述べたところである。この資料解釈は、立場によっておのずから判断が異なってくるだろう。

言うまでもないことではあるが、順集・規子内親王家前裁合の記事は後撰和歌集撰者が〈梨壺の五人ではない〉ことを示すのではないし、〈藤原伊尹・平兼盛・壬生忠見の三人である〉ことを示すでもない。源順たちが撰和歌所で万葉集の読解再編にあたったことを示すにとどまる。だから、順集・規子内親王家前裁合等を以て〈梨壺の五人は撰集に関与していない〉ことの根拠とはできないし、また〈撰者は藤原伊尹・平兼盛・壬生忠見の三人である〉ことの論拠にもできない。その点ははっきり区別して考える必要がある。

### 三 忠見集の詞書—躬恒の例について—

熊谷氏は後撰和歌集の撰者が藤原伊尹・平兼盛・壬生忠見の三人であることを主張している。藤原伊尹については撰和歌所別当であり、私も宣旨を蒙った「撰者」であろうと考えているので、異論はない。ただ、平兼盛と壬生忠見については撰者であるという根拠を見いだし得ない。熊谷氏は幾つかの論拠を挙げているが、そのうち誤解であろうと思われる点について以下に述べる。

熊谷氏は壬生忠見が撰者である論拠として、「卑官の忠見が村上天皇の宣旨によって醍醐天皇の御代の躬恒の前例にならい、御厨子所への勤務を許されている」ことを挙げている(四九九・五四六頁等)。このこ

とについて、拙稿では『例』の内容を直ちに勅撰集に結びつけるのは、他の裏付が無い状況ではなんとも言えない」と記したのだが、本稿では忠見集の「例」が忠見の後撰和歌集撰者に関わる記事だとは解釈できないことを明らかにしたい。

問題箇所は忠見集の本文は次のとおりである。三首が一連の話として収載されている。『私家集大成中古Ⅰ』の「忠見Ⅱ」（書陵部本）により、漢字をあて、濁点を打つ。

亭子院の御時、躬恒がさぶらひける例を引きて、

御厨子所にさぶらひせむと仰せ言ありて、宣旨を

弥生までたまはせぬに、上の人に言ひやる

22桜花たかき木末の靡かずはかへりやしなんおりはしぬとも

上の人の御かへし

23折りわびてかへらんものか月かげの山桜はく雲井なりとも

宣旨たまはりて、御厨子所にまいりはじむるに

24年を経てをゝきの灘に沈む身は浪の寄するをまつにざりける

書陵部本の親本かとされる承空本（『冷泉家時雨亭叢書 承空本下』）

では二二番第五句「ヨリハヒヌトテ」とある。二三番歌を考慮すると、

ハヒはワビで、折り侘びぬとて、の意。二三・二四番には異同なし。西

本願寺本（久曾神昇『西本願寺本三十六人集集成』）により漢字をあてる）

では、二二（西一七一）は詞書「延喜の御時、躬恒がさぶらひける例に

て、御厨子所にさぶらはせむと仰せられて、宣旨の三月までくだらねば、

ひとの言ひやる」歌第五句「をりわびぬとて」とあり、二三（西一七二）

は詞書「ある人に」歌三四句「こきかげの山のさくら」と。二四は歌

自体が無い。

熊谷氏は「躬恒がさぶらひける例」を、躬恒は延喜六年以降御厨子所

に勤め（同年丹波権大目を兼官）、それは十一年和泉権掾まで続いたとし、忠見については三十六人歌仙伝の「天曆八年五月御記云、為御厨子所定外膳部、以壬生忠見〔本名實子〕為定額膳部。天徳二年正月三十日任摂津大目」を引いて御厨子所勤務を確認し、躬恒の御厨子所勤務は古今集撰集の労であると推測している（四九九・五〇二・五四六頁）。それで、忠見はこの躬恒の例によって御厨子所に勤務したのだから、「勅撰集『後撰集』の撰者に命じられたとしか考えられない」（五四七頁）と言う。それ故にまた、後撰和歌集の奉勅は、忠見が御厨子所勤務を始めた天曆八年五月だとも言う（五〇九頁）。

もし、この解釈が認められれば、忠見撰者説には有利な資料と言える。それで、すこし細かに忠見集を検討する。

忠見が御厨子所に召された一件には、実は前段があった。即ち忠見集二〇・二一番がそれで、二二番以下はその続きの話なのである。書陵部本（『私家集大成』「忠見Ⅱ」適宜漢字をあてた）により本文を示す。

津国に年ごろ身を沈めてはべりけるに、おほやけ聞こし

めして、召しあげさせたまひて、内に召されて参りはじ

めて、夜ふけてまかり出る後のあした、左近少将ありと

しの朝臣して仰せられける和歌

20見しかども誰ともしらず難波渦浪のよるまでかへりにしかば

此かへりごと御覧ずべしとありし御返し

21住の江のまつとほのかに聞きしかばみちくる潮のよるかへりにき

承空本では二〇番歌第四句「ナミノヨルニテ」とあり、その方が意味

はよく通る。西本願寺本では、二〇番詞書「……召しあげられて、よひ

にさぶらひてまかりかへりて、又の日、左近少将ありとしの朝臣をして



仰せられたる」第四句「なみのよるみて」とある。「み」「に」の誤写関係であろう。二一番詞書は「このかへりごと<sup>に</sup>ますべし、とありしかば」歌下句「みちこしなす<sup>に</sup>やよるかへりけむ」とある。「す」は「み」の誤写であろう。

忠見と津の国との縁は、三十六人歌仙伝では天徳二年（九五八）正月に任撰津大目とあるが、あるいはもっと以前からであったのかもしれない。歌仙歌集本忠見集一四〇・一四一によれば、津の守から古歌を求められたり、館に呼ばれたりしたこともあったようだが、それがいつの事かは未詳。

撰津の国で沈倫していると村上帝に聞こえ、内裏に召されて、参り始めたある日、夜明け前に退出した。西本願寺本「よひにさぶらひて」の「よひ」が「宵」ならば、夕方に参候して夜明け前には退出したことになる。その勤務のしかたは普通とは思えないので、或いは「よひ」は「よる」で、「夜居にさぶらひて」の意と解するのがよいかもしれない。宿直でありながら朝を待たずに夜深く退出したのである。その朝、左近少将ありとしが帝の和歌を伝えてきた。その歌意、姿は見たが、誰とも分からなかった、夜中に帰って行ったので。

二一番、承空本同じ。詞書、書陵部本・承空本の「帝は返歌を御覧になるだろう」は当たり前すぎる。西本願寺本「この返事に<sup>に</sup>ますべし」であればどのような文意になるだろうか。

「ます」で考えられる意義は、増、勝、座、あるいは申である。座・申では文意が通りそうにない。勝の場合は、「…にます」で「…より勝る」の意。「君が御蔭にます蔭はなし」（古今集一〇九五）「匂ひ香は君にます<sup>に</sup>べきあらねども折りてぞ見する宿の梅が枝」（輔親集八九）等の用例がある。ただこの場合は、「この返事よりも勝るべきである」とな

るので、やはり穏やかな文意ではない。そうすると残る「増」で考えると、「この返歌（の出来次第）によって、（官位が）増すだろう」の意が想定される。こちらの方が状況にふさわしいが、この意とるには言葉がやや足りないようにも感じる。ただ実際に、この返歌によって二一番詞書の「亭子院の御時、躬恒がさぶらひける例を引きて、御厨子所にさぶらひせむと仰せ言」があったのであるから、いまは増の意で解釈しておく。書陵部本・承空本の「御覧すべし」は写本でも漢字であるが、「こらんすへし」「に<sup>に</sup>ますへし」の誤写関係があるかもしれない。

いずれにしても、忠見は壬生忠岑の子なのだから、気の利いた返歌をせよということである。その返歌「住の江の」の歌意、私が棲んでいる女が待っているとほのかに聞いたので、満ちてくる潮が寄るように夜帰ったのです。掛詞と縁語を駆使し、妻が待っていたからと色を添えた歌である。

忠見はこの返歌によって叡感を蒙り、官職の増益、即ち御厨子所勤務を勝ち取ったのである。御厨子所膳部就任はこの返歌の賞として与えられたものである。そのことをまず確認しておかねばならない。

ところで、使いに立った「左近少将ありとし」は何者か。市川久『近衛府補任』（続群書類従刊行会）に拠るに、天暦二年（九四八）に右少将藤原有年がいる。有年は三年までは確認されているが、その後『近衛府補任』に名は見えない。天暦四年一〇月（ただし原文は「同年」）には勅使としてその名が見え（西宮記卷八裏書）、天徳四年（九六〇）八月七日には「左馬頭有年」とある（西宮記卷五所引御記）。応和年間に左馬頭とある。近衛少将は正五位下相当官、左馬頭は従五位上相当官。近衛から馬寮への遷任というのやや不審が残るが、近衛少将から左馬頭に転じたのであろう。忠見集の「左近少将ありとしの朝臣」をこの有

年だとすれば、村上御記の天曆八年五月に忠見を御厨子所定額膳部と為したという記事と時期的には矛盾はしないであろう。

さて、村上天皇は、官職を与えるとして何を与えたらよいか、このような場合の前例はと考え、亭子院（延喜）の御時の躬恒の例を引いて、御厨子所膳部としたのである。村上御記にいう「定額膳部」の「定額」は定員のこと。定数内の膳部に任じられたのである。ただ、御記の文章、もし「定外」が定員外の意だとすると、「御厨子所の定外膳部の為に、壬生忠見を以て定額の膳部と為す」では意味が通らない。或いは「御厨子所の為に外膳部を定め」と読むのだろうか。不審。割注の「本名實子」、もとの名は忠實の意かと思うが、「子」の意味がわからない。

では「亭子院（西本―延喜）の御時躬恒が侍ひける例を引きて（西本―例にて）」とはどういうことか。

まず詞書の「亭子院の御時」「延喜の御時」の異同について触れておかねばならない。「亭子院の御時」という言い方は通常はしない。亭子院即ち宇多法皇の御代は「寛平の御時」という。では躬恒の例は寛平御時の出来事かというところではないであろう。

躬恒の官歴は三十六人歌仙伝（群書類従）によれば

寛平六年二月二八日任甲斐少目。延喜七年正月十三日任丹波権目。

御厨子所。同十一年正月十三日任和泉権掾。（下略）

とあり、古今和歌集目録（群書類従）ではそれぞれ「甲斐権少目」「丹波権大目」とある。躬恒は古今和歌集序では「前甲斐権少目」とあるから、おそらく古今和歌集撰集後に御厨子所に任じられたものとおもわれる。それは言うまでもなく延喜の御時（醍醐帝の御代）である。その点からは西本願寺本に「延喜の御時」とするのが穏当である。御厨子所は

丹波権目の兼官と考えられているが（山口博『王朝歌壇の研究宇多醍醐村上朝篇』四七四頁）、丹波権大目に任ぜられる以前からの官職かもしれない。ただし、もし古今和歌集編纂中も御厨子所に候していたとすれば、古今和歌集序での官職は「前甲斐少目」であるから、正式に任ぜられたものではなくて、単に候していただけの身分かもしれない。後撰和歌集一九には「同じ（延喜）御時、御厨子所にさぶらひける頃、しづめるよしを嘆きて、御覧せさせよとおぼしくて、ある藏人に送りて侍る十二首がうち」の詞書をもつ歌があり（躬恒集四二七）、躬恒が御厨子所に候したことは疑いなく、躬恒の御厨子所勤務は延喜の御時であることも確かだが、その期間を明確には特定できない。

忠見集の詞書「躬恒が侍ひける例を引きて」ということは、逆に躬恒も恩典として御厨子所に候した可能性を指摘できるかもしれないが、そのこともなお確言はできない。

躬恒の場合はまさに延喜の御時の出来事だから、西本願寺本忠見集に「延喜の御時」とあるのがよいように思えるが、なぜ書陵部本等では「亭子院の御時」となっているのだろうか。その疑問を考えてみよう。

亭子院は宇多法皇だから、天皇の御代としてなら「寛平の御時」である。寛平の御時を亭子院の御時と言い換えることは常識的にはあり得ない。亭子院という退位後の呼称を以てする理由は、あるいは書陵部本等は亭子院に関わる前例と考えていたのかもしれない。躬恒が宇多法皇に折々に庇護を求めていたことは、山口博『王朝歌壇の研究宇多醍醐村上朝篇』四七二頁以下に詳しい。例えば、大和物語三三段に緑袍（六、七位の色）を歎いた愁訴の歌があり、躬恒集には「家に侍りける桂の木を亭子院に掘りて奉る」とて詠んだ歌もある。

また宇多法皇はしばしば石山寺に御幸していた（大和物語一七二段）

が、延喜十六年九月の御幸では、西本願寺本躬恒集一六八番によれば、近江介藤原兼輔が接待にあたり、躬恒をして屏風障子に所々の絵に和歌を詠み書き付けさせた、法皇は一宿して翌日は御舟にて瀬田にのぼり、瀬田の橋のもとに舟を繋ぎ、近江介が物を奉った。その折、近江介兼輔が躬恒に言うことには、「厨舟に乗りて御舟に具して侍らふべし」と。そこで、躬恒は、

いづみにて沈みはてぬと思ひしを今日ぞあふみに浮かぶべらなる  
と詠んで亭子院に奉った、という。「いづみにて沈みはてぬ」は延喜十一年正月に和泉権掾に任せられ、その任期終了後は無官であったことを言う。「今日ぞあふみに」は「逢う」に「近江」を掛けて、今日は近江の湖に浮かんでいると、法皇の御幸に候し得た名誉をいい、身の浮上を訴えたのである。兼輔も年来の躬恒と法皇との関係を考慮し、かつは躬恒の和歌による興を期待して御船に近侍させたのであろう。躬恒が「厨舟」に乗ったのは、御厨子所にいたことと無関係ではないかもしれない。だが同時に、卑位無官の躬恒が法皇に近侍するには厨舟に乗るしかなかったということでもある。このような和歌による愁訴の結果がどのようなったかはわからない。

躬恒と亭子院（宇多法皇）との関係は諸資料によりよく知られていたであろう。そうであれば、「延喜の御時」の出来事ではあるが、具体的には亭子院との関係であるから、それで「亭子院の御時」という詞書になった可能性はある。あるいはまた御厨子所に候したことのある躬恒が「厨舟」で詠歌したことと、忠見が秀歌を詠じて、躬恒の例を引いて御厨子所に候せしめられたこととは、どこかで繋がるのかもしれない。

さて、忠見が叡感を蒙り、御厨子所にとの仰せ言があって後も、事は

すらすらは運ばなかった。宣旨が三月まで下されなかった。詠歌が何月のことだったか明確でないので、幾日幾月が経ったかも明確にできない。所を管掌するのは蔵人頭であり、御厨子所は別当として四位以上の殿上人が任ぜられる（和田英松『新訂官職要解』講談社学術文庫）。どこかで事務手続きが滞っていたのであろう。定数内の膳部として押し込むのであれば、昨日の今日というわけにもいかなかったのであろう。しびれを切らした忠見は催促の歌を「上の人」（殿上人、おそらく藤原有年であろう）に送る。高い桜の梢が靡かなかったら、花を折ることができないで帰ることになるのではないか、このまま沙汰止みになるのではないかと心配です、早く花の枝（御厨子所の職）を折らせて欲しい、の意。忠見は、藤原清正のために「あまつ風ふけるの浦にゐる鶴のなどか雲井に帰らざるべき」の歌を代作し、「この歌の禄たぶべしとあるに、音なければ、おどろかし申」すとして、「ひさしけれども待つは頼もし」と代作料催促の歌を送っている。このようなところ、忠見はなかなかしつかりしている。

やっと宣旨がくだって、勤務が始まった。そのときの詠歌に「をゝきの灘」に沈むとあるのは、津の国の地名であるはずだが、未詳。或いは誤写があるかもしれない。歌仙家集本では「年をへてひゞきの灘に沈む舟浪の寄するをまつにぞありける」とある。ただし、響きの灘は播磨の歌枕とされている。

忠見が確かに御厨子所にいたことは、拾遺和歌集一〇四〇に

御厨子所にさぶらひけるに、蔵人所ののこども、

桜の花をつかはしければ、 壬生忠見

もろともに我しをらねば桜花思ひやりては春をくらさん

の歌があることによって確かめられる。

忠見が御厨子所膳部を仰せられたのは歌徳譚の一種である。秀歌を詠んで衣被を賜ることは数多いが、官位はめったにない。官位の例としては早く大同三年（八〇八）に神泉苑に行幸あり、平群賀是麻呂に歌を詠ましめたところ、「いかに吹くかぜにあればか大島の尾花の末に吹き結びたる」と詠み、平城天皇は感悦して位一階を進めたという（類聚国史・曲宴）。漢詩の場合は秀句により召されることは折々ある。藤原為時の秀句による国替の例は著名であるが、江談抄巻四によれば、内裏の試で叡感を蒙った藤原諸蔭は藏人所雑色に補され、同じく藤原博文は藏人所に候すことを許された。島田忠臣が藤原行葛の述懐の詩を叡覧に入れたところ、哀憐して登省の宣旨を下したという。延喜十七年宗岡秋津の詩が天聴に達して勅により及第せしめたのもその例のひとつである。

ひるがえって忠見の事例を考えるに、何故に村上天皇は「見しかども誰ともしらずなにはがた浪のよるにてかへりにしかば」の和歌を少将有年をして届けさせ、返歌を求めたのだろうか。しかも、「これに増すべし」（書陵部本では「これ御覧すべし」との仰せを添えてまで。歌詞に津の国の「難波渦」を用いているから、天皇はその帰って行く男が忠見だと知っていたはずである。西本願寺本の「よひにさぶらひて」を採用すれば、前述のように、夕刻に参仕して、或いは夜居（宿直）であったにもかかわらず、まだ夜の明けないうちに退出の許される定刻を待たないで、退出したのではなからうか。近衛の直申は亥子丑寅の刻に行われ、近衛の夜行は寅四刻まで行われる（延喜式・北山抄等）。宿直にあたる者は名簿を弁官に提出しており、違反すれば罰もある。忠見がもし夜居に侍していたとしても、いかなる立場で夜居に侍していたかが判明しないので、確かなことは言えないが。

定刻を待たないで早々に退出して行く忠見を偶々天皇が見咎めて、ちゃんと姿は見えているぞ、秀歌を詠めば咎めまい、詠めなければ咎めはあるぞ、とのメッセージを送った。もともと津の国に沈倫していたのを召したのも、忠岑の子、和歌の家の子の故であったらうから、秀歌で切り抜けてみよ、との試みだったのではないか。

例えば、宇治拾遺物語巻九、大隅守が郡司の怠慢を戒めようとして鞭打つべき者を選んだ。ところが、それが白髪の老人だったので、何とか理由を付けて許すべく、「おのれはいみじき盗人かな、歌は詠みてんや」とて歌を詠ませたところ、震えながら「年を経てかしらの雪はつもれどもしもと（答・霜と）見るにぞ身はひえにける」と詠んだので、ひどく哀れがって許した。忠見の話も、そのような歌徳譚となりうる性質の話だったのであろう。

忠見は内裏では和歌に巧みな烏澁者として扱われるところがあったように、折々に和歌を求められたのであろう。忠見集六〇番に

内より召すに、遅く参れば、これに乗りて参れとて、

竹をたまはせたれば

竹馬はふみかちにしてあしければいまゆふかげに乗りてまゐらむという歌が収められている。内は村上帝であろうか。遅く参るは、なかなか参らないの意。帝はしびれを切らしてか、竹を遣わした。（竹馬にでも乗って）早く来いという謎かけ、からかいである。洒落た歌を詠んで弁解してみよ、との意図であろう。当時の竹馬は現在のとは違って魔女の帚のように笹竹に跨る。それで和歌で「踏み徒歩」と言った。「悪しければ」に「葦毛」、「夕景」に「鹿毛」を掛ける。「夕景（夕陽）に乗りて参らむ」は夕方には参りますの意。「月に乗りて」等と同様の言い方。馬の縁語と掛詞を多用した巧みな応答。帝はこのような応答を求



め、面白がっているであろう。「難波潟」「住の江」の贈答歌もこの類だったのではなからうか。

忠見が御厨子所に勤務した事情は以上のようなことであったと推察する。したがって、「躬恒がさぶらひける例を引きて」というのも、勅撰集作者として召されたと考えることはできないであろう。もし勅撰集撰者として召されて御厨子所膳部となったのであれば、忠見から仰せ言の実行を、宣旨を催促するなどということはあり得ないであろうし、宣旨が遅れるということもあり得ないであろう。

忠見が勅撰集撰者でなかったであろうことを間接的ながら示す資料がいまひとつ忠見集にある。かの宣旨の話のその次の和歌がそれである。

古き歌奉れと仰せらるゝに、忠岑がなど書き集めて参ら

するに、書き添えて参らする

25 言の葉のなかを泣く泣くもとむれば昔の人に逢ひ見つるかな

26 君が代にさかゆくべしと思ひせばとはましものを忠岑が道

古歌の召しは新しい勅撰集のためだったかもしれないし、単に忠岑の和歌を求められたのかもしれない。それに添えた忠見の和歌の二首目、我が君の御代に和歌が栄えるに違いないとかねて思っていたなら、父忠岑の道——和歌の家としての道を踏んでいたのに。「せば…まし」の反実仮想の詠法である。だから、実際には和歌の道を踏襲しなかったことを悔やんでいる言い方である。ただし、もっと直截に翻訳すれば、和歌隆盛の御代に勅撰和歌集撰者としての父の道を踏襲させてもらえなかったこと、そのような機会を得られなかったことを残念に思っているということであろう。和歌を「さかゆく」とも言っているので、後撰和歌集撰

進の宣旨後と見れば、「古き歌奉れ」もそれと関係するであろう。

二〇番から始まる一連の和歌、二四番までは一つのテーマでまとまっている。それに二五・二六も続くのであれば、天暦八年の頃のことである。ただ、年次的に必ず続いているという確証はない。

この和歌の詠歌年次を確定できないので、これ以上のことは言えないが、すくなくともこの和歌を詠んだときには、勅撰和歌集撰者である父忠岑の道、即ち勅撰集撰者を踏襲していなかった、とは言えよう。

#### 四 平兼盛と読人しらず

いま一人の平兼盛について。兼盛が後撰和歌集撰集に関与したことを示す直接資料は何も無い。熊谷氏は、兼盛の歌が六首も「よみ人しらず」で採られていることを挙げ、「本来兼盛作とわかっていて六首もの歌を読人しらずとする撰者もおかしければ、兼盛とてそのような待遇に黙っていないだろう」「そのような待遇に黙っていられるのは、他ならぬ兼盛自身が撰者の一人であったのではあるまいか」と言い、兼盛の名を示して採歌されているのが二首であるのは、伊尹の二首に遠慮したのだとも言う(四九八頁)。拙稿で、兼盛の歌が六首も「よみ人しらず」で採られているからというのでは弱すぎると書いたところ、熊谷氏からは新著で、何故弱すぎるのか説明して欲しいと求められた(五四六頁)。

他の直接的根拠により兼盛が撰者であると確定されれば、兼盛の和歌が読み人しらずになっている理由を考察するのは意味がある。しかし、〈兼盛の和歌が読み人しらずで採られていること〉は撰者である論拠とはなしえない。熊谷氏の論法を以てすれば、順や能宣・元輔ほどの歌人が自分の歌が一首も採られていないことに黙っていられたのは、彼等自

身が撰者だったからだ、という言い方も可能になる。

このような論法は本末を転倒しているのであって、平兼盛は後撰和歌集の撰者であることの根拠とはなしえない。緩く言えば、状況証拠の一つではあるだろう。だがそれで他を説得することは容易ではない。

## 五 おわりに

熊谷氏と私の考えの違いの基本部分をもう一度確認しておこう。

熊谷氏の主張の基本は、枝葉を取り除いてまとめれば、次のようになるであろうか（熊谷新著五三四頁他）。

・天暦五年、梨壺の撰和歌所は最初から両事業（万葉集の訓読と後撰集の撰集）を行う目的で設置された。梨壺の五人は万葉集の訓読・再編集に従事し、後で行われた後撰集の撰集にはまったく関係しなかった。

・後撰集の撰集は、天暦八年から藤原伊尹・平兼盛・壬生忠見の三人によって行われた。

対して私は次のように考えている（『平安朝和歌漢詩文新考』）。

・天暦五年、梨壺の撰和歌所は新勅撰集（後撰和歌集）編纂のために設置し、併せて万葉集の訓読・再編集が行われた。

・後撰和歌集の撰集としての宣言をくだされたのは藤原伊尹であり、梨壺の五人は寄人（召人）の立場でその編纂実務及び万葉集の訓読再編にあたった。

熊谷氏の論は後撰和歌集に関する全体に及んでおり、撰集問題に限っても、上記の整理は拙論と触れあうところをきわめて部分的に単純化したものであることをおこわりしておきたい。

一般的に言って、ある事についてA説B説が対立しているときには、〈A（B）であること〉と〈B（A）は成立しないこと〉とを論証しなければならぬ。ただし、直接的で確実な根拠に拠りA（或いはB）だと証明できれば、B（A）の不成立を言う必要はない。

後撰和歌集撰集問題については、梨壺の五人説にしても伊尹・兼盛・忠見説にしても、直接的で確実な根拠と言えるものがない。それ故、互いに自説の主張と他説の否定とを論ずることになる。その後は他の様々な要素も考慮した上で、それぞれの説の妥当性・蓋然性の比較になる。その比較に於いて、撰者藤原伊尹の下で梨壺の五人が編纂実務にあたったという考えに、私は相対的により蓋然性を認めるものである。

本稿の第二・三章で行ったことは、〈後撰集の伊尹・兼盛・忠見撰者説は成立しないこと〉を言うために、熊谷氏の主張する論拠が論拠とはできないことを述べたのである。ただこれも資料の解釈に拠るので、解釈が異なれば結論もまた異なるであろう。